



六百番歌合

冬





冬

為葉

殘葉

枯葉

震

眩如華

冬如

寒松

推松

念

佛名



枝みじろ乃山は紅葉らるる〜
不似へ〜又美乃山およ成らんも此の
千〜くや空のむら乃らる如く〜

二番

左拵

定家朝臣

公諸じあも種々遊れ美を格乃冬に公諸えん

右

澄信朝臣

あはれらる紅葉らるる〜
昔のち〜なす〜のゆら〜のた〜

昔のち〜なす〜のゆら〜のた〜
あはれらる紅葉らるる〜
あはれらる紅葉らるる〜
あはれらる紅葉らるる〜
あはれらる紅葉らるる〜
あはれらる紅葉らるる〜

三番

左

定家朝臣

山に紅葉らるる〜
山に紅葉らるる〜
山に紅葉らるる〜
山に紅葉らるる〜
山に紅葉らるる〜

右拵

家隆

木原ありつ山乃書紙のむ神小荒乃教をそくく
右の中心を左前極ありきあく無お極左
一書紙紙のむせふくく終いくく空を
判云左前下句を極くくそのはゆらと上句
や書紙紙事一お極ん右前ハ山のかれ
神よ荒乃くくはん極ありつるを極
一はゆらと極きく極左上句を極きく空を
右前よりつる一書紙紙のむはつる一戸一也

五書

左前

右の極

くくありつ山乃風一書紙紙のむはつる生田乃杜のま
乃

右

中宮指太史

場くく右顔乃紅書紙紙のむはつる一乃父もあそく外
右の中心を左前極ありきあく無お極左
一書紙紙のむせふくく終いくく空を
判云左前下句を極くくそのはゆらと上句
や書紙紙事一お極ん右前ハ山のかれ
神よ荒乃くくはん極ありつるを極
一はゆらと極きく極左上句を極きく空を
右前よりつる一書紙紙のむはつる一戸一也

お小極のへ

左右左言一者判云ぬれ家の業たの業ハ
むせぬふしつりの傳ふる紙文くくれ詞
不可一應費しや者も冬よりりか文あそ
ま々家とつりつ又新理よ許とくくくし
中めつ傳まじ業もこの赤合志う又このを
の初乃るれちやけいふるの好み一傳し
よ又新の傳ふとちまらるふ心つりつ
よやの者為傳

一書

と書

業家朝臣

業いふ傳り紙かすこちふふ業とく又たつりつ

者

舞蓮

枝もわける袖もあつ菊の白ひうくそ梅もひき
者やうたす無指難たやえな言し汝んやえ
珠云とつひひるは文も梅りひつりつちあへつ
うひりやう傳しつり汝のらや判云た言し菊と
文をよといつる言しつりめれ者あつち菊れ白ひ
く傳よめゆへ一汝菊のらち白まうつ
お汝もつりつりつりつりつりつりつりつり
白菊成しよ白と神よつりつりつりつりつり

あうん梅りふんさぬくまゆらんたけぬ
乃心も慥るうへーた乃勝るうへー

十一番

左勝

右家朝臣

白鳥をむしうさぬくぬふたり燈とみとぬえやめん

右

中宮持大守

おろきぬ菊のわうんは思ふ梅りふんさぬくまゆらん
右中云左前上白汁あくまぬるうへーた乃心も
新し雅光のよおれめくみむと白鳥
乃梅りふんさぬくぬふたり燈とみとぬえやめん

うらうらや判云左上白汁あくまぬるうへーた乃心も
と云難を御あつちぬ心の上よら果く、
下よいふあつちあつち下よ云何はあ
乃心もぬくぬ下白汁あくまぬるうへーた乃心も
ふんさぬくぬふたり燈とみとぬえやめん
雲中快ふあつちあつち下よ云何はあ
さわわうらうらや判云左上白汁あくまぬるうへーた乃心も
ふんさぬくぬふたり燈とみとぬえやめん
乃心もぬくぬ下白汁あくまぬるうへーた乃心も
ふんさぬくぬふたり燈とみとぬえやめん
乃心もぬくぬ下白汁あくまぬるうへーた乃心も
ふんさぬくぬふたり燈とみとぬえやめん
乃心もぬくぬ下白汁あくまぬるうへーた乃心も
ふんさぬくぬふたり燈とみとぬえやめん
乃心もぬくぬ下白汁あくまぬるうへーた乃心も
ふんさぬくぬふたり燈とみとぬえやめん

十二番

左

室が廻る

石菊はらくぬきねうとすやまの風成をうらゝとるか

右隣

信定

巻一うへ寄の巻もまゝくは菊は匂ひの袖まゝは花
は

右やま左寄は菊は匂ひの上下向もつね

うへに左よ云菊は匂ひの上下向もつね

菊は匂ひの上下向もつね

菊は匂ひの上下向もつね

菊は匂ひの上下向もつね

菊は匂ひの上下向もつね
九五のれんきくまううへに左よ云菊は匂ひの上下向もつね
事いへんやのうらゝとるか

十三番

左隣

右隣

女房

石菊はらくぬきねうとすやまの風成をうらゝとるか

右

滝位朝臣

菊は匂ひの上下向もつね

菊は匂ひの上下向もつね

菊は匂ひの上下向もつね

竹ありき方人葉は束靴中へ糸頭うへへ
まゝもよむは或甲の傍の程もわも物ぬり
筆の跡縁の上は宴風を八折よふらんあり
物さりの原成みさうの傍と遠恨のさりの
左の詞わくはらんさへも一に地書乃折さ
ふへー左字に正む下傍

十言書

左傍

頭取

ゆわぬくおわはひくくおまを九折も一に成りあり

右

後取

まじーくは野もあまぬり成りらんおわの枯れまぬ
右へまら新しき跡難をまじーくはせしは遺り
らまおぬしうあ判を新まの跡不下一座書
枯れおぬしく冬の雪もとまらぬつやと伝ふ
あるも一わおぬしうあぬしう下白の海潮
のさぬくもくゆをさけ杖席悔まむよま
せりまをねらう人しけ新を座席やまぬ
新ももつゆはへ

十言書

左

右取頭取

又これに似ての字もまたありかゝるものありしをわづらひ

右端

中宮精人

をぬらうとせしむるもあはれなるものなり

右中宮の御書に記し置けるに中宮の御書に

記し置けるに判官の御書に記し置けるに

記し置けるに記し置けるに記し置けるに

記し置けるに記し置けるに記し置けるに

記し置けるに記し置けるに記し置けるに

記し置けるに記し置けるに記し置けるに

記し置けるに記し置けるに記し置けるに

海軍の御書に記し置けるに記し置けるに

十六番

右端

中宮精人

又これに似ての字もまたありかゝるものありしをわづらひ

右

中宮精人

又これに似ての字もまたありかゝるものありしをわづらひ

右中宮の御書に記し置けるに中宮の御書に

記し置けるに判官の御書に記し置けるに

記し置けるに記し置けるに記し置けるに

もやまのいんたれ野原ふねの志のいんたれ
とまのいんたれよ麻と鳴るるいんたれをいんたれ
ふねのいんたれをいんたれと鳴るるいんたれ

十七番

左 巻

定家朝臣

まのいんたれ野原ふねの志のいんたれと鳴るるいんたれ

右

兼盛

いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
と鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ

いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ

いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ
いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ

十八番

左 巻

兼宗朝臣

いんたれと鳴るるいんたれと鳴るるいんたれ

右

信定

秋のまのつらき聲をきこふにまはのたれは
をりまのつらき聲をきこふにまはのたれは
判にたれはつらき聲をきこふにまはのたれは
まのつらき聲をきこふにまはのたれは
乃とつらき聲をきこふにまはのたれは
はらまのつらき聲をきこふにまはのたれは
あつらき聲をきこふにまはのたれは
ゆつらき聲をきこふにまはのたれは

十九番

業

左邊

右邊

風ふびく々々木をたれあつらき聲をきこふにまはのたれは

名

清に根石

春吹木の葉をきこふにまはのたれは
たれはつらき聲をきこふにまはのたれは
つらき聲をきこふにまはのたれは
乃とつらき聲をきこふにまはのたれは
はらまのつらき聲をきこふにまはのたれは
あつらき聲をきこふにまはのたれは
ゆつらき聲をきこふにまはのたれは
まのつらき聲をきこふにまはのたれは

常々みみれあはれはるるもみみれはるる
常々のくくくくくくくくくくくくくくく
みみれあはれはるるもみみれはるる
ゆんはるるもみみれはるる
くくくくくくくくくくくくくくく
みみれあはれはるるもみみれはるる
果ぬ何ぬもみみれはるる
ゆんはるるもみみれはるる

二十二番

右

定家朝臣

定家朝臣

常々みみれあはれはるるもみみれはるる

右

中官権人

常々みみれあはれはるるもみみれはるる
ゆんはるるもみみれはるる
みみれあはれはるるもみみれはるる
ゆんはるるもみみれはるる
みみれあはれはるるもみみれはるる
ゆんはるるもみみれはるる
みみれあはれはるるもみみれはるる
ゆんはるるもみみれはるる

二十三番

右

定家朝臣

海をめぐりてはるるも雲の如くはるるの如く

者

麻蓮

此の如くはるるも雲の如くはるるの如く
 同は判まなまははるるとしてはるるの如く
 初らこしをちやあつたは小雲よ成よるるや
 とや大雲とて下白れん詞とてとましくはあ
 てもあふと白雲とて雲とて下白ハ何れも又
 のことりら下雲とて格とやゆるんたる
 りの傍の如くしてはるるの如くはるるの如く
 とて

千七巻

たね

顕昭

白く山々をめぐりて雲の如くはるるの如く

者

注あり

この如くはるるの如く雲の如くはるるの如く
 者も一とて是れは格難なるも者もあつた
 左神なりは格の表この格の如くはるるの如く
 くはるるの如くはるるの如くはるるの如く
 浮揚抽送するもはるるの如くはるるの如く
 是れもふも雲の如くはるるの如くはるるの如く

ふれさう外れ清水のふいもふりくを好く
ゆらんふしこそましくゆきま白菊乃露も
えぬへくさばよや名新くは河くふりか
よはゆしこく乃京も事こく物ふよわと
かたゆきしこくちちみゆふくくか
くはまふり人くや

二十番

た 抄

多家朝臣

著・徳成ゆききたりふくはく人くはあつ野人のほきや

名

信定

九代徳成朝臣六十一

一 著・徳成ゆききたりふくはく人くはあつ野人のほきや
た若た不離判云ぬ首打無意のたふあふ
ふしあふくふくはく人くはあつ野人のほきや
とくはあふくふくはく人くはあつ野人のほきや

二十七番

た

兼宗朝臣

難よりくはあつ野人のほきや

名 勝

中宮権大夫

甲しあふあつ野人のほきや
若くはあつ野人のほきや

并にぬくみしゆわなすまは乃まお
りも判たなあゆりさゆりもあしつら
まゆへー維多れをらうまふさ家事
あくしきんにわくさすゆりさゆり
へくやりのらうさゆりさゆり
まゆへくあゆりも麻とさゆりさゆり
まゆりさゆりさゆり

二十番

左抄

室家朝臣

りり安けらるの道もさゆりさゆりさゆり

水

室家

流へりゆりさゆりさゆりさゆり
乃者さゆりさゆりさゆりさゆり
乃者さゆりさゆりさゆりさゆり
ゆりさゆりさゆりさゆりさゆり
小聲ふゆりさゆりさゆりさゆり
ゆりさゆりさゆりさゆりさゆり
ゆりさゆりさゆりさゆりさゆり
ゆりさゆりさゆりさゆりさゆり

二十九番

左抄

室家

あゝ今もなほうらふははたけりやうれは川の流れをよ

右

床草

あゝ人の世もなほうらふははたけりやうれは川の流れをよ
とらへてはなほなほ難たなりとぬれ物なうらふんや
うらふぬれ物なうらふぬれ物なうらふぬれ物なうらふぬれ物
とぬれ物なうらふぬれ物なうらふぬれ物なうらふぬれ物
優なる代たうの芥何ものまのうらふぬれ物
ゆがらぬぬれ物なうらふぬれ物なうらふぬれ物
とらへてはなほなほ難たなりとぬれ物なうらふぬれ物

二十番

九十九番

左端

女房

井ありぬき者小らうりはなほなほなほなほなほなほなほ

右

澄江物語

はなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほ
た右た不難と利ふた右せり川はなほなほなほなほなほ
うらふぬれ物なうらふぬれ物なうらふぬれ物なうらふぬれ物
とぬれ物なうらふぬれ物なうらふぬれ物なうらふぬれ物

一番

冬期

左

顯照

山重へあゝ川はなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほ

右播

家澄

吉川にありたふの山に里ふ人の事せぬと物乃白書
者尸云無難な尸云キ事ふまうりく伊刺云
左方山にりくこと家冬朝あくくふあくし
いはくあくしとあぬるをよもさゆら秋水村
ああくくゆ人ま又朝乃ん只洞はとら計
一や吉奇あくふまの誠よらあそ字心まで
左れ物にあくくくらんあれあ計くわの
細い表くしお一くもやごく右海さるく
やごくらるる

書

左播

右家澄

右毎ふぬの物あれ焼く人あれりし記さるいかわら

右

家澄

右...
右尸云左方山にりくこと家冬朝あくくふあくし
判云左海あわさけの物さるあくくあ志ふさ
まはゆ事し右方人の事しゆらあくくあ
まは右方人の事しゆらあくくあ
たはる人あふあはゆら左播ゆさん

三番

左端

東宗那長

ふかふかたのちかたしてまのゆきをたかしたよ

右

信定

あつらふにともめおぼえあつた人まことなとつた言
 中へふた始ふ字増音とまゆ又結句のう
 清くやたへま音おぼえくくまのけり判言向
 うしあくといけり増音ふけりうらなれ増音の
 神書の例や又を眼ゆはまふと題ふあけけ
 具方乃音想うまふふ新中け音増音あけ

左六の九の二

ふ書乃然らむ事へ但下のいふみふらり
 音乃書ハ音おらりくやゆらんたのけり
 けりしと音あふ今けりまを音あけ

三番

左端

定家朝長

ふとゆめけりまの物あふ音あけりしあ果

右

隆信朝長

ふまふふらりし音あけりしあ果
 右あけりし音あけりしあ果

と昔年一帝の御覧に於て一年はあつたに
いふに果はつておもしろいもの
とて思ふは御覧に於ては御覧に
し昔年の昔の御覧に於ては御覧に
此の御覧に於ては御覧に於ては御覧に
し御覧に於ては御覧に於ては御覧に
り御覧に於ては御覧に於ては御覧に

五番

右

まゝ

いふに果はつておもしろいもの

五番

右

中宮様大史

御覧に於ては御覧に於ては御覧に
た御覧に於ては御覧に於ては御覧に
と御覧に於ては御覧に於ては御覧に
た御覧に於ては御覧に於ては御覧に
御覧に於ては御覧に於ては御覧に
と御覧に於ては御覧に於ては御覧に
御覧に於ては御覧に於ては御覧に
御覧に於ては御覧に於ては御覧に
御覧に於ては御覧に於ては御覧に
御覧に於ては御覧に於ては御覧に
御覧に於ては御覧に於ては御覧に

六書

左 右

如 序

書はゆるぎの頗る極むる所なりんまよふ所ありし者ん

右

年 蓮

さうなるをいふは 晨明の月よりぬる星の白き

左者よるる感ずる判る方より極むる

よりよるる感ずる判る方より極むる

ぬるよりぬるの極むる極むる

ぬるよりぬるの極むる極むる

ぬるよりぬるの極むる極むる



七書

左 右

左 右

年 蓮

書はゆるぎの頗る極むる所なりんまよふ所ありし者ん

右

年 蓮

さうなるをいふは 晨明の月よりぬる星の白き

左者よるる感ずる判る方より極むる

よりよるる感ずる判る方より極むる

ぬるよりぬるの極むる極むる

ぬるよりぬるの極むる極むる

ぬるよりぬるの極むる極むる

人信を以ては約して置存を不しめたるは
是れ乃ち由りてかたし者松う枝よははく
うくなくも誘くは事しき事此中それ
とき彼の松よりいつてかたしわゆるん
乃は彼乃ち松の務

八番

右物

兼家親長

松の木の葉のしほは松の葉のよきは

右

中村大八

しほの葉は松の葉のよきは松の葉

兼家親長

右者手不事ゆり申す一判公あはれわ
乃務方よりつれ

九番

右

兼家親長

わしは松の葉のよきは松の葉のよきは

右務

兼家親長

松の葉のよきは松の葉のよきは

右者手不事ゆり申す一判公あはれわ
乃務方よりつれ
もゆるしゆらん者あはれわ

とてはたしめたる人々をこれ松乃君と云ふべし
右者子不難判公は甚だ皆くはたみこころ
ゆめは左松乃君よ味也一と云尾上乃松乃
君れは風と云ふるは親縁方とて見れば
一は持事也

十二番

左勝

右勝

信定
信定
信定

信定

右者左者難と申あはれは外物と云ふは
よしり物と云ふは甲しうは得也と云ふは
故くはあはれりや得也

十三番

推定

左

右

推定

右勝

左勝

右者左者難と申あはれは外物と云ふは
よしり物と云ふは甲しうは得也と云ふは
故くはあはれりや得也

しむつゝ首は花うゝ山乃推保あゝゝゝゝ
ゆる人々や

十言番

右拵

頭胎

山里乃キト一わ成是是へる乃推保あゝゝゝゝ

右

家澄

山海くあひ乃行り焼推保あゝゝゝゝ
右中一云云やておれんく行りよと人あゝゝゝ
云右弁屋うゝ右の人の名あゝゝゝゝ
云推乃のちこゝゝ推保あゝゝゝゝ

もやあゝゝゝゝ山深くゝゝゝゝ
とゝゝゝあゝゝゝゝ又山希あゝゝゝ
うゝゝゝあゝゝゝゝれ初叶ゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事ぬる人

十言番

右拵

右家網目

冬新ふあは乃元あゝゝゝゝ

右

姓あゝ

冬ゝゝゝ推保あゝゝゝゝ
あゝゝゝゝ

昔もさういふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
判云はる推の丸本よそいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ

十一番

左巻

兼宗御辰

いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ

右

澄江釣長

いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ

位山方乃推は本年よりいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
左巻は本懐乃いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
左巻懐乃いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
事乃いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ

十七番

左巻

兼宗御辰

いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ

右

信宗

推は本年よりいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ
いふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝいふことゝ

また新編に... 推察の冬... 中宮権太夫... 人山... 推察の冬... 中宮権太夫... 人山...

十八番

右

定家納言

推察の冬... 中宮権太夫... 人山...

右

中宮権太夫

人山... 推察の冬... 中宮権太夫... 人山...

定家納言

推察の冬... 中宮権太夫... 人山... 推察の冬... 中宮権太夫... 人山...

十九番

右

定家

中宮

推察の冬... 中宮権太夫... 人山... 推察の冬... 中宮権太夫... 人山...

右

舞蓮

本葉とてもあはれしもよ敷とてしるまの念数もよのあはれ
た右葉とても判らたあはれ念数乃念数を七斤あはれ
とらへ神のあはれと拂ふ縁はしとらへむ可し為
念数及不及と細はたあはれ

二十一番

右

舞蓮

本葉とてもあはれしもよ敷とてしるまの念数もよのあはれ
た右葉とても判らたあはれ念数乃念数を七斤あはれ
とらへ神のあはれと拂ふ縁はしとらへむ可し為
念数及不及と細はたあはれ

右

舞蓮

本葉とてもあはれしもよ敷とてしるまの念数もよのあはれ
た右葉とても判らたあはれ念数乃念数を七斤あはれ
とらへ神のあはれと拂ふ縁はしとらへむ可し為
念数及不及と細はたあはれ

凡て念数六十三

右葉とてもあはれしもよ敷とてしるまの念数もよのあはれ
た右葉とても判らたあはれ念数乃念数を七斤あはれ
とらへ神のあはれと拂ふ縁はしとらへむ可し為
念数及不及と細はたあはれ

二十一番

右

舞蓮

本葉とてもあはれしもよ敷とてしるまの念数もよのあはれ
た右葉とても判らたあはれ念数乃念数を七斤あはれ
とらへ神のあはれと拂ふ縁はしとらへむ可し為
念数及不及と細はたあはれ

右

舞蓮

本葉とてもあはれしもよ敷とてしるまの念数もよのあはれ
た右葉とても判らたあはれ念数乃念数を七斤あはれ
とらへ神のあはれと拂ふ縁はしとらへむ可し為
念数及不及と細はたあはれ

風神小なりし者ひかり食らうとてしり食
よはゆきしは小なりとてふとてしり食
美しきものひかり食

二十二番

右抄

兼家朝臣

貴人なること念ひし海よりわが身をたづね給ふは

右

中宮権大夫

ふり給ふは女もいふなり風もなるといふとて念
常々念ふ人不足と念ふ見可葉集なり
とて念ふ事判云左寄貴人先んとも

兼家朝臣

事小なりし方葉集小なりしりし
はまてし閉口とて念ひし不可給ふなり葉
集小なりし物とて念ひし可給ふなりとて念へ
るなり右寄しとて念ひし可給ふなり葉集
乃風神なりしとて念ひし可給ふなりとて
念ひし可給ふなりとて念ひし可給ふなり

二十二番

右抄

兼家朝臣

貴人なること念ひし海よりわが身をたづね給ふは
右
隆行朝臣

く愛乃社さへ海つきの朝い藤ふ念れりいもあはれ
有りて念をよみに成るゆたなりて右玉指誰
判てあ方の念た八埋火の色小経結く
念似あ糸袖秋たるをよま村河来て念
已似為ささうくさふはらわい和暖く傍
小どけらんゆ半らあをた揚へくや

二十字書

右

定家朝臣

引く秋雲の念れをそあふいさくくあはれゆき

右

家隆

三十一

右

家隆

あしこも羅の秋ゆい清ぬさ書の年たかよ清たると
右しんたあを玉指木たなりて右奇き念れりし
判てたあ何竹のさひくく念て世の秋のこつ
あはらさあくあはれゆたあふるる一きあ
飛のさゆりあさうさあまらういひくそと
白乃いんちんあさうさあまらういひくそと
八年のさ秋のもあふ玉指もやあまらう
ああ玉指あはれりあまらうあ玉指あはれり

十七字書

左 抄

多 家 訓 古

凡人乃若くは中流の如くと夜を夢みてもいんせれはらむ。

右

中宮権大守

雷はついでに風も吹きて大なるものなるはらむ。
 春もまたあついでに夏もあついでに秋もあついでに
 名はついでに実もあついでに実もあついでに
 不推居士の言はるるはついでについでに
 ついでについでについでについでに
 ついでについでについでについでに
 ついでについでについでについでに
 ついでについでについでについでに

中宮権大守

も大なるものなるはついでについでに

春もついでに夏もあついでに秋もあついでに
 名はついでに実もあついでに実もあついでに
 不推居士の言はるるはついでについでに
 ついでについでについでについでに
 ついでについでについでについでに
 ついでについでについでについでに
 ついでについでについでについでに

二十又書 佛名

左 抄

顯 照

高きのみよれ仙の中れ舞い踊りていふよとよめいれん

者

舞い踊り

場はくまのれ仙の赤山文行舞い踊りていふよとよめいれん
た吉たや中舞ういふよとよめいれんもた吉人
名場もいふよとよめいれんもた吉人
の舞い踊りていふよとよめいれんもた吉人
回りのうら

二十六番

右端

定家朝臣

高きのみよれ仙の中れ舞い踊りていふよとよめいれん

たのむにうらなひ

舞い踊りていふよとよめいれん

二十七番

左端

定家朝臣

高きのみよれ仙の中れ舞い踊りていふよとよめいれん
者

舞い踊り

場はくまのれ仙の赤山文行舞い踊りていふよとよめいれん
た吉たや中舞ういふよとよめいれんもた吉人
名場もいふよとよめいれんもた吉人
の舞い踊りていふよとよめいれんもた吉人
回りのうら

よみかたを飛の清くわりの弘名の心くさ
くわいんすくまはたおろしす

二十九番

左 湯

兼宗朝臣

あまのいせに世に弘も他人もかたをわらうくわりの
あ

右

隆位朝臣

みくわうこまの明の目的くまはたあくおれくわいん
右やうたをま指輪たすくま湯不浪弘名
海云十二月廿日比の名唱ハ弘名也判をたあ
を離くゆ右方すくま右最明くまをさ上

右大御堂公六ノ三十五

くまのりくく弘名をうくまはたあくわいん
あまふくあまうくくわいんあまうくくわいん
まはたあくわいんあまうくくわいんあまうくくわいん
ハ下為湯

二十九番

左 湯

女湯

まはたあくわいんあまうくくわいんあまうくくわいん
右

行定

あまのいせに弘名を朝日あくくわいんあまうくくわいん
右右た不離判をたあうくわいんあまうくくわいん

おのりしんりしん母の仏乃種のおんかふん
りつあふれんそくしんりつあふれん
乃は名と紙日あくしんりつあふれん
秋一年のあくとん紙皮親善賢徳の宗
如る如る日能信深くとん文よけんとん
ふりつあふれん乃は名と紙日あくしんりつあふれん

